

### 13. 発達段階・発達課題

生活科が1・2年生のみを対象として設定された最大の根拠は、低学年児童の発達段階が「自己中心的」であり、「行動と思考が一体化している」ことにあります。それゆえに、具体的な活動や体験を通しての総合的な教育内容がこの時期求められていることになります。このとき、子供一人一人の身体発達、精神面の成長、これまで育ってきた環境などの「発達段階」や「発達課題」に違いがあることを考慮しなくてはなりません。

#### 発達段階・発達課題とは

ピアジェは、子供の認知発達の時期を大きく4期に分けています。

- ①感覚運動的段階（～2歳）
- ②前操作的思考段階（2歳～7歳）
- ③具体的操作段階（7歳～11歳）
- ④形式的操作段階（11歳～12歳以降）

この理論によると、1・2年生の時期は前操作的段階から具体的な操作段階に入る頃に相当する。前操作的段階は、直観的思考の段階で子供は興味・関心から物事を捉えるため、羅列的で、関係付けることは難しい。また、具体操作段階の子供は、具体的に身近にある対象について情報を整理し、分類し、関係付けるなどの論理的思考ができるようになる。このように考えると、1・2年生の子供は、むしろ幼稚園児と同じ発達段階に属するのである。生活科が幼稚園との段差の解消を一つのねらいとして創設されたのは、このような背景があるのである。

一方、それぞれの発達段階において社会から学習することを期待され、子供自らが果たさなければならない一連の課題を「発達課題」という。発達課題の内容は、次の3つに分けられる。

- ①身体的成熟に関する課題
- ②社会的な要請に基づく課題
- ③自我の欲求の発達など、個人の人格の発達に関する課題

そして、個人の生活のある時期における課題が達成されることが、次の段階の課題達成へと導き、また、ある時期の課題達成が失敗すると、続く段階の課題達成を困難にすると考えられる。